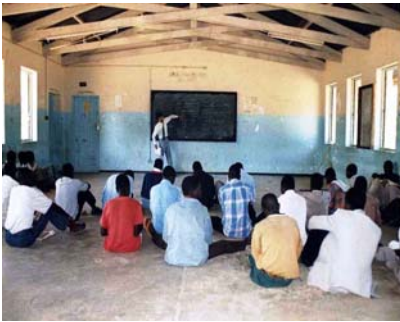


簡素な学校でも楽しい授業風景

マラウイ西部のザンビア国境に近いマガワ・セカンダリースクールです。教室には風通しを良くするために大きな窓枠があります。枠があるだけで窓に扉やガラスが入っているわけではありません。教室には机も椅子も無く、床に座って授業を行います。

理数科教師の青年海外協力隊員は黒板に板書しながら授業を進めます。チョークや黒板拭きは盗難に遭うため先生が持参します。教科書はありません。生徒のほとんどは男性です。年齢はまちまちで、20歳を超えているであろうと思われるような生徒もいます。女子は家事や農作業の手伝いに駆り出されるため、出席率が悪いかあるいはドロップアウトしてしまいます。



教師は、インフラの劣る田舎の学校には赴任したがらないか、あるいは給与の高い近隣のボツワナ辺りへ転出する傾向があり、数が不足しています。生徒によると「日本人の先生の英語力はもうひとつだけマラウイ人の先生のようにサボらないからいい」と評価しています。学校に来ることが出来るだけでも幸せだと思っている生徒さん達との出会いでした。(荒木京子)

写真: マガワ・セカンダリースクール マラウイ 1999年

“アールディーアイ通信 No.20/2005”から

武漢の朝はダンスで始まる

中国と日本は近くて遠い国と悪口を叩かれるほど、ギクシャクした関係が気になっています。私は四川省成都市に3年、湖北省武漢市に3年、JICAの専門家として赴任していました。農村が私の現場であり、現地にいると反日デモも話題にならないほど中国内では報道規制が徹底していました。資源小国の日本は、13億人の中国の動きで大きく左右されるほど、中国の経済成長が続いています。

6年の滞在で見聞した庶民の暮らしぶりを数回に分けて紹介します。最初は「武漢の朝はダンスで始まる」。夜が明けると公園におばちゃん達がグループ毎に拡声器を持って、それぞれのなわばりの場所に集まります。朝からボリューム最大にして音楽に合わせて踊り始めます。雨が降らなければ毎日続きます。



50歳で定年となったおばちゃん最大の楽しみとなっています。夕方になると街灯のある広場で再び繰り返されます。伝統の太極拳は本当に少なくなりました。

私は毎日ジョギングで公園を走っていましたが、おばちゃん方のパワーをもらって6年間病気一つせず帰国できました。(安達武史)

写真: 早朝のダンス 中国 武漢 2005年

“アールディーアイ通信 No.20/2005”から

パパロアパン流ライフスタイル

ここはメキシコ、メキシコ湾岸のベラクルス州と太平洋岸のオアハカ州の州境に位置するパパロアパン流域のロス・ナランホ村。

パパロアパン流域は極貧地域の一つ、住民の過半数は少数民族のワステカ族。州政府の貧困対策事業の一環で、灌漑施設や圃場等の農業生産基盤整備が進められ、シニア海外ボランティアが3名も派遣



されている。主な農作物は、サトウキビとタバコ。しかしながら、国際市場価格の低迷により生産が頭打ち。州政府はこれらに替わる新たな作物の導入を検討している。

調査で訪れたロス・ナランホ村、兎に角暑い日差しを避けて、日の出と共に畑仕事、午後 2 時には引き上げて午後の休息。夏の午後の気温は殺人的、当然の帰結として「日陰で冷えたビールを一杯やりながら」がパパロアパン流のライフスタイル。(増淵清)

写真:パパロアパン流域ロス・ナランホ村のキオスク メキシコ ロス・ナランホ村 2004 年

“アールディーアイ通信 No.19/2005”から

サバクバツタと人間の戦い

2003 年から 1 年半にわたってアフリカで大発生したバツタは、アフリカ最西端に位置するセネガルにも大きな被害を及ぼしました。日本名はサバクバツタ(desert locust, *Schistocerca gregaria*)。トビバツタ類の一種です(足達太郎 2005:アフリカの作物害虫－被害と防除の現状, アフリカの農業、その課題と可能性)。本来このバツタは各個体がばらばらに生活していますが、何らかのきっかけによって高密度で成育すると集合性と移動性が極度に強い、全く異なる性質を持つようになります。

セネガルでは、農民が家族総出で畑に押し寄せるバツタを棒で追ったり、畑周辺の雑草に火をつけて畑を守ろうとしていました。しかし、如何なる手段を用いても群生化したサバクバツタをくい止める事は出来ませんでした。セネガル政府は環境への配慮から、持続効果が低いフェントロチオンなどの有機リン系殺虫剤を超低濃度に薄め、飛行機で散布しました。これも大量の散布を繰り返し行わなければならず、環境へ



の影響が心配されています。また、セネガル北部地域では多くの場合、飛行機で農薬散布を行っていました。しかし、数少ない飛行機で全域をカバーすることは難しいようでした。農民の中には農薬散布の飛行機を心待ちにする人がいる一方、散布された農薬によって喉を痛めたり体調不良を訴える人もいたようです。

(岩井理恵)

写真:外壁を越える幼少期のサバクバツタ セネガル ンバンヌ 2004 年

“アールディーアイ通信 No.19/2005”から

家族みんなで農作業

子供たちからおじいちゃんおばあちゃんまで、家族みんなが協力して行う農作業。少し前まで日本でも普通に見られた大家族による心温まる風景が、フィリピンの農村にはあります。「お母さん、これは?」「虫が喰ってるから除けてね。それから先の方は揃えてね」「はい」。貧しいながらもカバドン一家には笑いが絶えません。

マンゴーの木の下でササゲの出荷調整を手伝っている子供たちのもう一つの重要な日課はトマトの虫取り。熱帯に位置するフィリピンでは害虫の繁殖力がすさまじく、農産物価格に比べて農薬が高いこともあって、小さな子供であっても貴重な戦力です。日本同様悩みの種は海外からの輸入農産物。野菜や果物



の価格が安値で安定し、家族の人数のように収入が伸びません。成人した息子たちも、よりよい仕事があれば町に出たいというのが本音のようです。それでも彼らの明るい笑顔を見ていると、家族一緒に健康で働くということの本当の価値というか、人生の本質みたいなものに改めて気づかされるのです。

(末光健志)

写真:マンゴーの木陰で家族そろって フィリピン 2004年

“アールディーアイ通信 No.18/2005”から

登下校は自家用の白馬で

南米の内陸国パラグアイの南部地域では、雨期の間、白い制服姿の児童や生徒が馬で登下校する光景を頻繁に目にします。

国の南西端に位置するこの地域は、西側を北から南へ流れるパラグアイ川と南側を東から西へ流れるパラナ川に挟まれた、湿地と沼沢の多い、木立の少ない低平地になっています。春から秋にあたる10月から4月にちょっとした降雨があると、広い範囲の草地、耕地とともに多くの支線道が、何日も時には何週間も数10センチから1メートルを超える水をかぶったままになります。

この地域(1,300 km²)では、少数の大中規模の農家や牧場が大部分の土地を所有し、戸数にして3分の2(およそ2,000戸)を占める小規模農家は合計しておよそ1割の土地を所有するに過ぎません。しかし、冠水はどの農家の土地も等しく襲います。



学校まで遠くて5kmほどの道のりの大部分は大人でも通行が不自由になります。四輪駆動車の所有者は極めて限られます。

農家や牧場の子弟は小学校へあがる前から馬を扱えなければならぬというわけです。親にとっては、雨期になるとそろそろと出てくる小型のワニや大小の蛇を避けるためにも、子供は馬で出歩かなければなりません。(華表一夫)

写真:白馬で帰宅途中の姉妹 パラグアイ ピラール 1998年

“アールディーアイ通信 No.18/2005”から

寝心地のいい伝統的なゆりかご

パナマの先住民であるノベ・ブグレ族は、伝統的なカバンであるチャカラ(Chacara)を日用品として使用しています。原料は自治区内で自生するピタ(Pita: *Agave americana*)という植物です。ピタより繊維をとり、手で編んでカバンにしています。一昔前まではナンセ(Nance: *Byrsonima crassifolia*)の樹皮などを使用した天然染料のみで染色されてきましたが、現在では化学染料も使用しています。模様は蛇や蝶を表すものや簡単な幾何学模様ものがあります。また、生活必需品としてばかりでなく、現在では民芸品として販



売もされています。チャカラは強度が強く頑丈なので、多目的に使用し、収穫したバナナやキャッサバを大量に入れたり、時には赤ちゃんをいれたりして運んでいます。また、赤ちゃんの揺り籠の代わりに使用しています。

(三原大輝)

写真:チャカラの中で眠る赤ちゃん パナマ ノベ・ブグレ自治区 2003年

“アールディーアイ通信 No.17/2005”から

お茶／おしゃべりの時間

ここはパラグアイ、首都アスンシオンからバスを乗り継いでほぼ一日がかりのラパス市。女性はたいてい働き者だ。農家の婦人は、朝は暗いうちに起きて牛の世話をし、乳を搾り、家事万端をこなし、自給のための農作物を作る。夫の、耕耘、播種、中耕除草、収穫作業も手伝う。この国は過去2度の戦争(三国同盟戦争 1864-70年、チャコ戦争 1932-35年)で男の働き手を多く失った。以来、女性労働力の拡充目覚しく、そのまま現在に至り、今も男性より女性のほうが一般的に働き者だそうだ。男性の仕事口が極端に少



ないためか、主婦が働き家計を維持している家庭や、夫が妻子を残して蒸発してしまった家庭など、多く見聞きする。そんな家庭も貧しさにめげず、子供たちは7-8歳になると、教師の家や、自営業などの家に住み込み、手伝いをしながら小学校へ通う。胸を張って悠然と歩く女性の姿が印象的だ。

(高島章子)

写真:女性が談論する光景 パラグアイ ラパス 2000年

“アールディーアイ通信 No.17/2005”から

ガーナの食事

ガーナには、アジアの「米飯」、東アフリカの「ウガリ」といった、国中どこでも広く食べられる代表的な食べ物がありません。バンクー、ケンケ、フーフーなどが代表的な現地食ながら、どれも日本のご飯のように毎日は食べていません。前二者はトウモロコシ粉が、後者はキャッサバと料理用バナナが材料ですが、バンクーはキャッサバ粉が混ざったり、フーフーでは料理用バナナの代わりにタロイモが使われたりします。

バンクーはトウモロコシ粉にお湯を加え醗酵させたドウを、火に掛けた熱湯に少しずつ入れ蕎麦掻き状に捏ね固めます。ケンケはドウを、バナナの葉やトウモロコシの苞(皮)に包んで蒸し、どちらも醗酵による酸味があります。フーフーは材料を茹で蒸して、臼と杵で餅様に搗きます。この他、茹でたヤムイモやキャッサバ、北部の乾燥地帯ではソルガム、ミレットの粥もよく食べられ、町場では米の消費が伸びています。



これらはどれも主食で味は付いていません。

おかずは基本的にアブラヤシ油でタマネギと肉、魚、野菜などを炒め、トマトと塩を加えて煮込んだソースです。バンクー、ケンケは手で一口大に千切り、ソースを付けて食べます。フーフーは一人前を各自の器に盛り、汁気の多いソースを掛けます。まさに雑煮様で、やはり手で食べます。

(森田信晴)

写真:バンクー調理 ガーナ オチェレコ村 2002年

“アールディーアイ通信 No.16/2005”から

プラスチックは便利だなあ

パナマ共和国のノベ族は、1930年代に至るまで、彼ら以外の外部者・外部社会とは、かなり限られた接触しか持っていなかったとされています。しかし、1960年代になると、当時の写真より、衣服・装飾品から農機具、調理器具等、生活雑貨としてかなりの物資が外部から購入されるようになっていたことがうかがえます。

それから40年を経て、それらの物資の多くは既に、彼らの生活必需品となっています。

中でも、プラスチック製品の登場と流入、定着の程度には、目を見張るものがあります。1960年代の写真からは、水をためる大小のいれ物から日常用の食器にいたるまで、様々な



容器の全てが、ひょうたんの一種でまかなわれていた事がうかがえます。が、現在は、そのほとんどがプラスチック製品に置き換わっています。比較的に手しやすく(中古品が人気)、軽量かつ耐久性に優れ、ふたの取り外しも自由自在、水汲みに非常に便利なプラスチック容器ですが、山に捨てても土に還らないところも、これまでのひょうたんとの大きな違いです。

ちなみに、ノベ族はかつて陶器も作っていたと言われますが、現在その技術は失われ、思い出す人もいない状況です。(加藤麻子)

写真:「車ごっこ」をするノベ族兄弟 パナマ ノベ族・ブグレ族自治区 2004

“アールディーアイ通信 No.16/2005”から